



意を体する

「意を体する（いをたいする）」とは、人の意見・考えを受け止め、それに則った行動をするという意味の言葉です。基本的には上司など目上の人物の意見に対して、それに自分も同意し、心一つにして行動に移す場合によく使われていますが、中には、意見に従うどころか、明確な意思表示や指示や命令などがなくても、上司の思いや考えを感じ取り、予想し、上司が満足するような形（行動）にして表すことが大切だというような、かなり精神論的な解釈をする人も少なくありません。

日本社会にはこれまで、職場内の上下関係の中で、部下が上司の「意を体する」ことを美德と考える風潮があり、それが評価にまでつながってきました。現在、この考え方は薄れてはきているものの、一部にまだ根強く残っていると感じています。学校という職場の中にも、「校長の意を体する」ことが美德であるという考え方が感じられる場面があり、私自身、それを校長が強く要求する場合さえあることを、いやというほど経験してきました。

この言葉は、前近代的、非科学的で、極めて封建的な言葉であり、現代のあらゆる職場において、「百害あって一利ない」考え方だと思っています。

これまで私は、「意を体する」ことについての封建的な解釈を押しつけられても、その期待に応えることはできませんでした。私は超能力者ではありませんので、その種の方々の悪意も含めた内心や思いの全てを理解することはできず、彼らが要求するような形では、意は体せませんでした。

自分の考えは、明確に話し、指示しなければ伝わらないものです。

教員として子供たちを指導する際にも、子供に伝わる明確な指示は不可欠です。子供たちがその指示を受けて迷わず学習活動に取り組み、成果につながることを繰り返し実感することで初めて、教師との信頼関係が生まれます。そのように子供たちを指導し導く立場の私たち教職員が、職場内で「意を体する」ことに翻弄されていたのでは、正しい教育を行うことはできないのではないのでしょうか。

校長と職員との関係

前述の通り、教職員は校長の意を体する必要はないと思っています。その前提で、校長と職員との関係について、私見を述べます。

学校においては、教頭以下にとって、校長に「意を体せ」と言われても、校長の全ての考えや動きを予想することはできず、翻弄されてしまいます。校長の顔をうかがわざるを得なくなり、評価を気にかけ、校長対応が全てかのような錯覚に陥ることさえあります。このような状況下では、学校全体が大局を見失う危険性もあります。

現代日本は封建制や専制ではありません。学校組織に民主的な仕組みや風土を作り、機能させるのが校長の役割です。危機管理に強いのも、封建制ではなく、民主制です。

学校においては、校長からの「指示・伝達」や「お願い」という名の「職務命令」が日常的に行われています。明らかなパワーハラスメントによる言動は言語道断ですが、それを受ける職員の立場になれば、よほどの違法性や反社会性等がない限り、「職務命令」として従わざるを得ないことも多いでしょう。（校長に限らず、組織の長として責任ある立場にある者は、その状況を自覚し、立場を悪用してはいけません。）

職務命令は、緊急、必要等、やむを得ない場合のみに行うべきであり、その全てが、子供たちのためを基本としていなければなりません。校長の「思いつき」や「自分がやりたいこと」による私的な感情を満足させるための命令であってはならないのです。

普段職員と接する際には、持論を強く語ることは慎重にしなければなりませんし、自慢はもつてのほかだと思えます。意見の食い違いがあっても否定せず、複数で話し合うことで修正するなど、強権的な態度にならないように努めなければなりません。職員と競うような言動も厳に慎まなければいけませんし、間違っても、職員の能力や成果に対して、嫉妬や自己顕示欲から、足を引っ張るようなことがあってはいけません。また、校長が注意や助言をすることは必要ですが、怒ってはいけないと思っています。感情的で不機嫌な上司には報告することもためらうようになり、相談は絶対になくなるでしょう。その結果、情報が遮断され、ますます状況が悪化する悪循環に陥ります。

常に職員一人一人の人格を尊重し、敬意を持って接することができる人間でなければならないと、日々、肝に銘じています。

..... 切り取り線

子供たちのための、意見・提案・要望・校長に知らせたいこと など

2023年2月24日（ ）年（ ）組 児童氏名

※メールでも随時受け付けております。kosaki-k@sendai-c.ed.jp（校長直通）